

現地通信



アロール・ジャングスから

坪内良博

1 村への帰還

6月23日昼、バンコック、クアラ・ Lumpur を経て、再びアロール・ジャングスにやって来た。昨年来雇っているサアド夫妻が、前日から待っていたのに遅い遅いと言いながらとにかく大喜びで迎えてくれた。大掃除をしたらしく、部屋にはちり一つなく、わが家は極めてよく保たれていた。マラヤ大学留学生で休暇中留守番役をしていた前田成文氏が5月はじめに去ってからの一カ月余りのできごとを、大きな身ぶりで、ものすごく誇張して説明した後、米、石油、食用油、コーヒー、粉乳、砂糖、洗剤等がなくなったから早速買えという。たちまちのうちに大散財をすることになった。

2 アロール・ジャングス村

アロール・ジャングスは、東南アジア研究センターのマレーシア・インドネシア計画に基いて、マラヤ調査班班長だった故棚瀬襄爾博士と吉田光邦氏とが先発隊として、昨年6月、本隊より一カ月前にマラヤへ来

て、社会学的・人類学的調査のために選択したマレー半島北西部ケダ州の稲作地帯に位置する小さな田舎町である。この調査地については、既に棚瀬博士が、「東南アジア研究」2巻2号の現地便りで紹介されているし、同誌3巻1号には、「マラヤ北西部の稲作農村」と題して、経済的側面についての中間報告が、口羽・坪内・前田によってなされているので、ここではアロール・ジャングスのマラヤ班をとりまく、物的・人的環境について雑文をしたためることにする。

アロール・ジャングスは、ちゃんとマラヤの地図にも載っている地名であるが、さてどの範囲がアロール・ジャングスかというややこしくなる。このあたりのマレー人家屋は、水路に沿ったやしの林の中に建てられ、それらがモスクを中心として「村」(Kampung)を形成しているが、アロール・ジャングスは、それらの村の名前の一つではなく、パダン・ララン(Padang Lalang)とクバン・シム(Kubang Siam)という二つの村が接触するあたりに存在する小さな中国人の商店街を中心とした地域の地理的な名称に過ぎない。

(図1参照)70戸余りの中国人の商店や住宅は、マレー人社会の中の租界のような存在だが、町というには小さ過ぎて、行政的には大部分がパダン・ララン村に入る。われわれの調査範囲は、パダン・ララン村のマレー人(200余世帯)を中心として、それにこの中国人の街および隣接するクバン・シム村の一部を含んでいる。

3 村での生活

わが家は、アロール・ジャングスの入口に位置する小学校の真向いにあり、6畳位の仕切り4つからなるマレー式の高床家屋で、裏の家主から月30\$（約3,600円）で借りている。村のマレー人家屋のようにやしの林に囲まれてもおらず、中国人の家のように大きくて奥深くもなく、おまけにトタン屋根ときているから暑いこと甚だしい。この附近で最も暑い家だということで、特に暑い日にはマレー人の下男さえ逃げ出すほどである。

暑いといっても、日中、室内の温度はせいぜい32°Cでとまる。とは言え、この地方は現在雨期にあたって湿度が高く、たえず身体が汗ばんで気持ち悪い。雨は極めて男性的な降り方をして、はげしいときは家が本当にぐらぐらゆれる。去年は川があふれて、わが家のまわりは沼のようになり、50m離れた（棚瀬説による）便所へ通うのが大変だったが、今年はどうやら降雨量が少ないらしく、気候的条件は今のところ昨年よりもよい。

この雨を利用して田植えが始められ、毎夕、一列になって田植えから帰る女達の姿が窓からみられる。現在田植えはほぼ8割終ったところで昨年より少しはやいように思われる。田の荒おこしは男の仕事だが、田

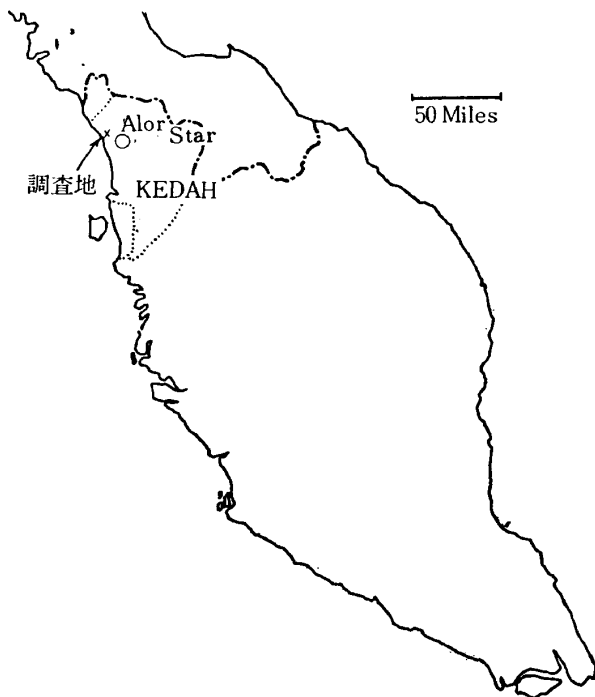


図1 調査地点 Padang Lalang 村

植えはこの村では完全に女の仕事である。クク・カンビン（山羊の爪）とよばれる木製の柄のついた金具の先に苗をはさんで植えていく。10人位の女のグループに男が一人か二人ついて苗運びをするが、女にまじって仕事をするのを他の男にみられるとはずかしいと言う。女が田植えをしている間、男はどこかにかくれて時間をつぶしている。

4 われわれの召使

わが家に下男夫婦がいることは既に述べた。一番身近にいるマレー人として彼等について少し詳しく紹介する。男はサアドといって62才、女はロキアといって46才である。二人とも再婚で、サアドは5回め、ロキアは3回めの結婚だが、今の結婚は9年間続いている。サアドは3人の妻と既に離婚したが、一人はまだ結婚したままなので、現在二人の妻を持っている。イスラムに従えば二人の妻を平等に扱わねばならない筈だが、ロキアの方が若いのと、収入源がこちらにあるのとで、殆んどの時間を当方で過している。一夫多妻といえ、われわれの通訳のハリムという中学生の父親も妻を二人持っているが、これは几帳面に二人の妻が住む二つの村を往復している。一般には殆んどの男は一人の妻しか持たない。ロキアは12才のとき結婚した最初の夫に離別、二番めの夫に死別してサアドと結婚した。二番めの夫との間に20才になる息子があるが、彼とサアドとの仲は余りよくない。

このように書くと、彼等は実に何度も結婚しているようであるが、当地には結婚回数8回、9回というような猛者もいるのでおどろくにはあたらない。

サアドは学校の雨水を貯えたタンクから水をかついで来るのが主な仕事で、この水が料理と水あびに使われる。ロキアの仕事は、料理と洗濯と買物だ。このあたりでは男が買物に行く場合が多いので、昨年ここにはじめて来た頃は、毎日サアドに金を渡していたが、つまみぐいが余りにも激しいので、ついに買物の費用も給料もロキアに渡すようになった。彼女にとっても今がかせき時だから、サアド程ではないが買物の費用を少しずつこまかしている。せいぜい1日1\$（約120円）までだから、われわれは見ても見ぬふりをしているが、ロキアに会計の実権が移ってから、彼女がまたたく間に金の腕輪と首飾りを買ったのには驚いた。両方で200\$（約24,000円）位する品物で、わずかを差し

引くだけで売れるし、また質入れもできるから、この辺の女性にとっては最良の貯蓄法である。

彼等には月はじめに60\$（約7,200円）の給料を払う。官吏を除けば極めて低賃金のマラヤの田舎では、食事付で60\$の前払いというのはかなりよい条件である。

ロキアはこの中からサアドに小遣いを渡す。例えば、先月（7月）は10\$、今月（8月）は5\$を渡している。サアドは麻雀が好きでこの金を持って勝負にいき、またたく間に一文無しになって、ロキアにしかられながらしょんぼりしている。男性の権力が強いイスラム社会にはあるまじき光景である。

このようにうだつがあがらない状態にはあるが、サアドはなかなかのしゃれ者で、結婚式のおよばれや金曜日の礼拝（ときにはさぼることもあるが）には、上等の服を着て背中をしゃんとおぼして出かけていく。若いときに、サアド・ストッキングという仇名をつけられたという。当時珍しい靴下をはいて歩いていたからだ。

ロキアには一つの大きな目的がある。それは家を新築することだ。せっせと貯めて、既に材木を143\$で買い入れた。総工費予算は、300\$（約36,000円）だが、現在のわが家よりも小さいがしっかりした家ができる筈である。

彼女の料理は、方法と材料とが共に限られているので実に単調である。三種類くらいの魚、骨と皮ばかりのにわとり、もやし、馬鈴薯、鶏卵、あひるの卵等がその限られた材料の大部分を構成し、これらを油でいためるか、カレー煮にするかが主な料理法で、昼と夕は全く同じ料理ができるから、1週間もするとかなり閉口する。それでも昨年にくらべると味つけなどがかなりうまくなっている。料理はまずいが、話は上手なので、わが家の台所にはたえず近所の若い娘や老婆が遊びに来ている。

夕方、電気が来て扇風機が廻り出すと、サアドとロキアは片っ端から窓をしめて鍵をかける。このあたりにはときどき強盗が出没す

るからだ。昨年8月には4人組が他の村からやって来るのを、アロール・ジャングスの警察が村人の通報で事前に知って、待ち伏せをして途中で捕えたという事件があったし、今年の6月にはとなり村で強盗があって、金持の村人が一人刺されて死んだ。われわれは防衛策として、銀行にいかないと換金できないと盛んに宣伝している。

5 われわれの調査

こちらに着いてから20日ばかりすると、日羽益生氏がやって来た。更に10日遅れて前田清茂氏が到着。わが家はこれで満員となり、ここで寝とまりしていたサアド夫婦は自分の家から通って来るようになった。続いて藤本勝次氏と梅田輝世さんがアロール・スターに来て、アロール・ジャングスのマレー班は最盛期をむかえた。

日羽氏は昨年約半年にわたって当地に滞在していたので、アロール・ジャングスでは顔が広く、われわれ日本人の代名詞のようになっている。郵便屋が「クチバノ」と声をかけても他の者の手紙しかないこともあるし、筆者などが一人で街を歩いていると、「クチバ」とよびかけられることがある。

前田清茂氏は、中国語が達者な天理大の先生で、アロール・ジャングスの中国人の調査をうけもっている。彼の到着以来、わが家には中国人の来客が急に多くなった。昨年から出入している金商（金製品を売る



写真1 水牛を使っての荒おこし。うしろに見えるのはわが家とマレー人国民学校。

店)の梅という青年の外に、精米所で働いている30過ぎの男——シャツの肩に喪章をつけているから、われわれは彼を「喪章」とよぶ——、中国人学校6年の洗濯屋の息子などが常連である。中国人との接触が多くなると、前田氏というチャンネルを通して、彼等のマレー人批判がいろいろと伝わって来る。いわく、「マレー人は怠け者だ」、「すぐに人の真似をして、借金をしてまで単車を買う」、「料理が下手なマレー人をなぜ雇っているか」、「マレー人の店は品物の並べ方がなっとらん」、「マレー人の墓はまるで恰好をなしていない



写真2 魚釣りは女だけがする。

い」、「マレー人は親が死んでもなかない」等々。言語も、宗教も、生活様式も全く異なる民族が、密接な経済的関係を通じて並存するマレーシアという国はなかなかむずかしい問題をもっている。その中国人も決して完全な一つの集団ではなく、福建人と広東人、金持と貧乏人というような互いに対立する側面をも有している。

関西大学教授の藤本氏はイスラムの研究家で、アラビア語が読めるので、アロール・ジャングスのマレー人から尊敬されている。立派な体格の持主で、昨年こ

の家に来たとき、薄い床がぬけたことがあり、「トアン・ジャトー」(落ちた旦那)という仇名もついており、サアドとロキアは、こと毎に、落ちた後の彼の注意深い歩き方を真似する。

紅一点の梅田さん(関西学院大学大学院)がわが家に通うようになってしばらくは、散歩にことかきりて、わが家をのぞきに來る人々が急増した。マレー人、中国人、男、女を問わずわが家の前をぞろぞろ歩いてのぞき見していく。イスラム社会では、われわれ男性が女性にインタビューするのが非常に難しく、この頃になってようやく近所の女の子と短い会話を交わせるようになった程度であるから、彼女の参加には大きな期待がかけられている。実際、到着して間もなく、彼女はわれわれでは到底みることができない女の子の割礼の場面に出くわしたし、村の産婆からマレー人が用いる墮胎薬を貰って來たりした。このおろし薬は一目みて明礬(みょうばん)であることが分った。

前田氏は毎日中国人地域へ、梅田さんはアロール・スターからバスで通って來てわが家の近くのマレー人の家へ、そして口羽氏と筆者は、昨年120\$ (約14,400円)を投じて購入したささやかな自家用の自転車に乗って、2マイルにわたってえんえんと続いているパダン・ララン村のどこかの家へと出かけて、調査は少しずつ進行してきた。

この通い馴れたパダン・ラランへの道は、ごく最近つくられたアロール・スターへ続く新道で、昨年は赤土の道だったのに、今年はほぼ完全に簡易舗装ができた。現状のバス道路は迂回して來るので、アロール・スターから9マイルの道のりだが、この新道を通ると、5マイルにまで短縮される。旧道ができる前は、小舟で川を伝って数時間かかってアロール・スターへ行くか、泥沼のようなところを歩いて行ったというから著しい変化だ。

便利にはなったけれども、移住と自然増によって人口も増えて來た。70年前には人家はきわめて少なく、ジャングルが多い土地だったというが、今では殆んどが水田と化してもはや開拓の余地もない。イスラムの相続法、あるいは子供に土地を均分するマレーの慣習法に従って、マレー農民の土地は次第に細分化されるし、土地のない農業労働者もかなり発生している。

中国人とても例外ではなく、アロール・ジャングスは既に満員で、アロール・スターへの通勤者が多く生

じて来た。

昨年は向いのマレー人国民学校からめったに歌声がきこえなかったが、今年は、金曜日のコーランばかりでなく、オルガンなしで歌うので少し調子が狂ってはいるけれども、斉唱がさかんに聞えるようになった。

アロール・ジャングスのテレビ所有者も、3人めが現われた。

マラヤにおける農村の変化は激しい。われわれの家が、マラヤ産の木材、スウェーデン製の合板、日本製のトタン板で成り立ち、その中ではマレーシア、日、米、英、独、仏、オランダ、オーストラリア、香港、中共等の製品で生活が営まれているように、都市から、外国から、物質的ばかりでなく精神的にもどっと新しいものが流れ込み、住民は何らかの形でそれに対処せねばならぬ。その変化の一場面で、われわれの調査は行なわれているのだ。

あと20口もすれば、藤本、前田(清)、梅田氏、更に口羽氏がここを去る。そして筆者も9月末にはアロール・ジャングスを離れ、マラヤ班は、プロト・マレーの集落で別行動をとっている前田成文氏

を残すのみとなる。目下、人々の関心は、われわれの家財道具の処理にむけられており、ベッドを買いたい、自転車を買いたいという希望が、下男夫婦を通してまい込んだりする。

調査は次第に終りに近づいてくる。こうして集め得た限られた資料から、この社会をどこまで分析して再構成することができるだろうか。ともかく最善を尽くすつもりである。

1965年8月8日

アロール・ジャングスにて

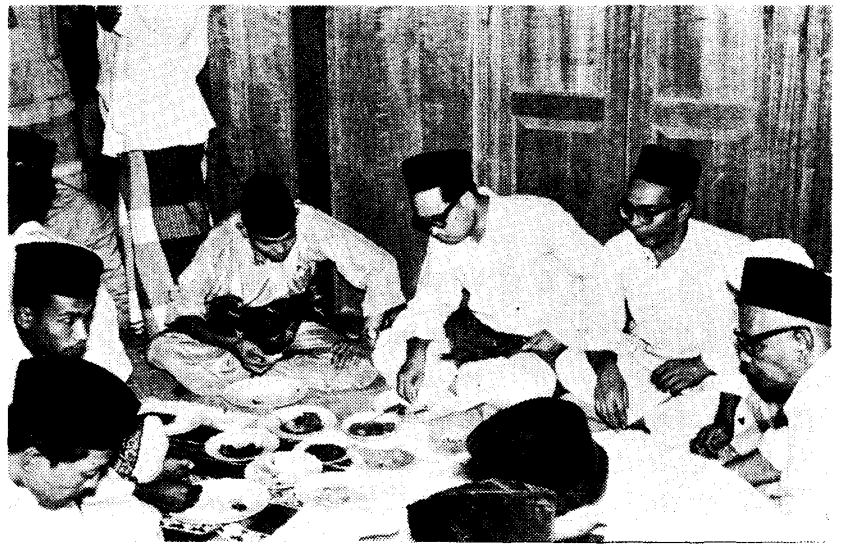


写真3 結納式に集まる人々。